

# 「新教育システム」のさらなる発展を目指して

福山大学 学長  
松田 文子



まつだ・ふみこ氏

1963年 広島大学教育学部心理学科卒業  
1971年 広島大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程修了  
文学博士(広島大学)  
1978年 広島女子大学助教授  
1984年 鳴門教育大学助教授(学校教育学部)  
1987年 鳴門教育大学教授(学校教育学部)  
1993年 広島大学教授(教育学部)  
2001年 広島大学教授(大学院教育学研究科)  
2004年 福山大学教授(人間文化学部心理学科)  
福山大学人間文化学部心理学科長(2006年3月まで)  
2006年 福山大学人間文化学部心理学科主任(2007年3月まで)  
2007年 福山大学人間文化学部長(2009年3月まで)  
福山大学大学院人間科学研究科長(2009年3月まで)  
2009年 福山大学副学長(教学担当)(2010年5月まで)  
2010年 福山大学学長就任

文部省(現文部科学省)において長らく教育行政に携わった創設者、宮地 茂が自らの理想とする大学の価値体系を真摯に追求し、優れた全人教育を実践する大学を目指して本学を設立したのは1975年。「全人教育」という理念は、現在もなお脈々と受け継がれています。

例えば、広大なキャンパスの一角に学内農園があります。6月に田植えをし、10月に稲刈り、秋の学園祭で景気よく餅つきをするのが開学以来の本学の伝統。土に親しみ、収穫のよろこびを知ることは全人教育のベースだとの考えがそこに現れています。また、保護者(保証人)を交えた教育懇談会、就職懇談会も開学以来継続しています。当初は「なぜ大学が小学校や中学校のようなことをするのか」といった意見もあったようですが、学生一人ひとりの成長には、大学と保護者が手を取り合うことが不可欠という確固たる信念がそれを実行させてきました。ここにきて多くの大学が保護者会などを実施するようになってきておりますから、私どものやり方も間違いではなかったのでしょう。

少人数教育も当初より実践しています。教員1人当たりの学生数は17~18人程度。特に新入生ゼミは、1人の教員が4~5人程度の学生を担当します。また本学は、多人数の一斉講義は全人教育につながるという考えから、大講義室はごくわずかです。そのくらい少人数に徹しており、私立総合大学として、かなり良心的ではないかと自負しております。

私は7年前に国立大学を定年退職し、本学に来ました。着任後すぐに、「学生一人ひとりに対して本当によく手をかける大学だな」と非常に感心した記憶があります。そして実際のところ、手のかけがいのある学生が多いのです。生真面目に勉強してきたような学生は少なく、磨く前の原石のような学生が多いため、体験型の学びなどをしていくと驚くほど伸びる学生が出てくる。入学後の変身の度合いが大きいため、教員は自分が育てているという実感を得やすく、そのため

にいつそう面倒見が良くなるのでしょう。私自身この大学に来て、学生がかわいと感じる場面がすごく増えました。卒業式では、よくぞここまで育てくれたと毎年、感慨無量です。人生の最後にとってもすばらしい経験をさせていただいていると日々感じております。

## 「目標設定」と「人間関係づくり」が中心の教育

昨今の傾向として、まず学生に目を向けると、入学してもなかなか大学になじめない若者が増えている印象があります。一方で社会に目を向ければ、新卒採用の厳しさにも表れていますが、社会が若者に求めるレベルは日増しに上がっています。こうしたことを大学でクリアするには、何人かの教員が優秀であればいいということではなく、すべての教員が目指すべき教育を実践できる「システム」を稼働させる必要があります。「福山大学新教育システム」はそのような理念で、2009年度よりスタートしました。またの名を「目標設定型教育システム~シャイな現代っ子向き~」といい、学部学科ごとに教育目標を設定し、それに向かって教育プログラムを開発していくのがこのシステムの特長です。各学部学科に対する社会的ニーズをリサーチしたうえで卒業時の教育目標を設定し、さらに目標を細分化し、1年次~4年次ごとの目標も設定しています。

そしてもうひとつ、「シャイな現代っ子向き」というサブタイトルも示すように、そういう若者たちに対応した、「人間関係づくり」を中核に据えた教育手法という点も大きな特長です。教員との緊密な関係、仲間との共同作業や対話、地域への社会参加などを通じて人間関係の輪を広げてゆき、その過程で「知識」「技能」「態度」を身につけ、生涯にわたる学びの基礎を手に入れるのです。一般に、学ぶためには意欲が必要ですが、その意欲は強い絆で結ばれた人間関係から生まれることがしばしばあります。つまり、私たちは豊かな人間関係の中では生き生きとしますが、そうでな

いと居場所がないと感じ、疎外感に悩まされるのです。そうならないように、人間関係を広げながら各学年の目標を達成していく仕組みといえるでしょう。初年次教育やキャリア教育、インターンシップなどもこのシステムに包含されています。

新教育システムの企画・運営のために、2009年4月に大学教育センターを開設しました。この組織の強みは、運営委員として各学科主任が参加していることです。各学科の考えをダイレクトに聞き、カリキュラムに吸収し、すぐ学科に下ろす。柔軟かつスピーディな対応ができていると感じています。

## 目標は「備後に根ざした日本有数の総合大学」

今後重点を置くこととしては、新教育システムがまだ稼働し始めたところですから、PDCAサイクルに則って中身をいっそう充実させ、その進化発展に努めることが私の最大の仕事と思っています。一方で創立36年目を迎え、校舎改修を検討する時期となり、それとともに中身の再検討も進めています。具体的には工学部を改革する予定で、時代にあった総合工学部に変えるべく現在コンセプトを練り上げています。また、経営戦略のひとつとして、広報の強化も喫緊の課題と認識しております。本学には人的にも物的にも素晴らしい点が多々あるのですが、それがうまく社会に伝わっている印象がなく、学生募集に結びついていないように感じるからです。

本学の使命は、地域に役立つ人材を輩出すること。その一点に集約されます。その点で牟田泰三前学長が掲げた「備後に根ざした日本有数の総合大学」という目標は、今もなお変わりません。それを目指してこれからも、やると決めたことを一つひとつ、きちんと、ていねいに実現していく所存です。そうした努力により学生の満足感を高め、優れた人材を輩出し、今以上に地域から愛され、必要とされる大学になる、それが私の最大の希望であり目標です。 ■